

『色取り』

君と話していると、気分の色が変わるんだ。

水色かな。

青春ならこんな色だろうか。

でも、もう少しだけ夜の輝きを纏ってる。

じゃあ桃色だって？

穏やかな陽の色。

でも少し、寂しさを感じるんだよ。

なら白かい？

両手から溢れそうな日々。

さあ。まだわからないんだよ。

あれ？

君の名前は、なんだっけ

おにぎり

創文手帖 目次

巻頭詩

「色取り」

おにぎり……一頁

小説『御伽噺』

「鯉六物語」

おにぎり……四頁

「忘れじのボーレン・ピアース」

西谷墨白……十頁

「Idolity of the heart」

花瀬文寧……十六頁

「水泡に帰す」

及川まよ……二十二頁

「アイノウ」

おとり草氏……二十六頁

詩『名前』

「しおり」

及川まよ……三十八頁

「名付け親」

狭野方花……四十頁

「監獄」

綴歩……四十一頁

「曖昧な名前より」

雲霧林……四十二頁

短歌・俳句『月』

……四十五頁

十二年前に関する思考力試験

綴歩……五十一頁

闇鍋

「眠眠打破」

おとり草氏……六十頁

雲ひとつない空に太陽は燦々と輝いている。

「いじょう」は（委譲）で「うりあげ」は（売上）

ある夕暮れの方のことである。

「名前を忘れちゃったんだよ」

プリンセス「約束」

昔々あるところに

額には白い角がある。
ハッピーエンド

それが母であつたと理解するのに
ずいぶん時間がかつた。

しやりしやりしやりしやり

しやりしやりしやりしやり

あ、かき氷食いたい。

マナー
小説
お伽噺

『鯉六物語』

おにぎり

今日もそいつは、釣りをしていた。

着物で釣り竿を下ろしている姿が、部活終わりに見える。

なにも釣れなさそうな沼に腰を下ろしているが、どうやら鯉を釣ろうと奮闘しているらしい。場所を変えればいいものの、それはしたくないそうで、ひたすらそこに座っていた。

「名前を忘れちゃったんだよ」

そう言って、そいつは笑っていた。

曰く、ここで釣れる鯉ならば、自分の名前を知っているかもしれないらしい。だから毎日通っているそうだ。春夏秋冬気にせずに、その薄っぺらい着物が現れる。

馬鹿げた話だ。だが、今までに釣った鯉は色々と話してくれたらしい。

釣った数は六匹。全てハズレだったそうだ。

「鯉六さん、今日は釣れた？」

「ダメそうだね。今日も収穫なしだよ。そろそろ怒られてしまう」

そいつはへにやつとした笑みで言った。

鯉六。名無しだと呼びにくいため、適当にあだ名をつけたのだ。それがなんとなく雰囲気合っていて、密かに気に入っている。

「誰に怒られるの？」

「……誰だろうね。思い出せないんだよ」

「記憶喪失者みたいだな」

「だから記憶喪失者なんだって」

言い返される。その拍子に釣り竿が揺れた。

釣れる魚も逃げてしまいそうだ。そう思いながら、私はノートを取り出して、日課を始めた。

近くでは、鯉六が釣り竿に向き合う気配がする。

ペンと水の音のみが辺りを揺らしていた。

「……毎度思うんだけど、いつもなにを書いているんだい？」

やがて、鯉六が口を開いた。

私は顔を上げずに、「鯉六観察帳」と返す。

「……え？」

呆けたような返事が聞こえた。聞こえなかったかと、もう一度繰り返す。

「いや、それはわかってるって」

こちらに非難するような視線を投げつけながら、なぜ書いているのか訊かれた。私は顔を上げ、素直に答える。

「文芸部で使えそうだと思う。ネタに困らない」

「……陰口を本人の前で言わないでくれないかな？」

「私の最大級の褒め言葉」

「あ、そう……」

鯉六は視線を釣り竿に向けた。

その様子を見てから、私も視点をノートに下げて、言葉の指摘をする。

「それと、陰口を本人の前で言うのは、悪口と言う」

「へえ。ここ百年の言葉は難しい。……じゃなくて！」

自分でボケて、自分で突っ込んでいる。こういう奴が主人公になったら、話は回りやすそうだ。普通の主人公にはなれるのかは不明だが。

なんせ、こいつはよく百年なんて最近だという態度を取っているのだから。

その様子は観察帳の端々に見られる。まるで百年以上は生きているような発言で、容貌も相まって、頭が大丈夫なのか知りたくなる。

「ねえ。鯉六さんは何歳なの？」

「忘れちゃった」

尋ねると、いつも通りの返答が返ってきた。これだから妄想癖があるただの奇人なのか、それとも本気で言っているのかがわからない。

「……じゃあ、今はどこに住んでいるの？」

「家だよ」

「記憶喪失でも、家はわかるんだ？」

そう聞くと、鯉六は困ったように笑った。

「うん。覚えてる最後の場所さ」

それ以外はなにも覚えていないと、鯉六は遠くを見る。

鯉六の家は、中央に囲炉裏がある、古い木でできてるそう。

逆にいうと、それ以外はわからないらしい。誰かいた気がするのに、どこも静かだと言う。

「鯉六さんの家は、遠いところにありそうだね」

「そうだよ。常世だ」

「……ふうん」

鯉六が変なことを言うのはいつもの事だ。私はひとまずそれをノートに書いておく。いいネタは持っておくに越したことはない。

「常世はね、君らに忘れられると、消えてしまうんだよ」

「へえ」

その設定はどこかで見たことがあると思った。主題歌が「忘れな
いで」だった、死者の国の物語だ。つまり、鯉六は死者なのか。

そう尋ねると、鯉六は物騒な想像をしないで欲しいと呟いた。

と、その時だった。鯉六の釣り竿が軋んだ。

「七匹目だ！」

「おお、鯉六卒業だね」

そう言っ釣竿の先を見る。鯉六が引つ張り上げたのは、群青の
中に赤と金が混じったような、見たことがない立派な鯉だった。

それが陸にあげられ、ピチピチと跳ねる。そのパクパクと開閉す
る口から、どこかで聞いたことがあるような言葉を発した。

『昔丹後の國に浦島といふもの侍りしに、其子に浦島太郎と申し
て……』

浦島太郎だ。

いや、それよりもガチで言葉を発しやがった。

驚いて、ペンがノートから離れたまま固定される。というか全身
が固まって動かなくなる。

だがそんな中、のほほんとした中に残念そうな色を帯びた声が響いた。

「ハズレか……」

「……。マジか」

感想を言っている間にも、魚は浦島太郎の話を続けている。それもよく知っている浦島太郎とは、随分と違ったものだった。この浦島は亀を釣り上げている。

そんな浦島太郎の話に私は覚えがあった。亀を釣り上げ恩を着せる浦島太郎は、確か室町時代に書かれた御伽草子のもものだ。

と、それが突然途絶えた。見ると鯉六が魚を水に返している。

戻された鯉は、すぐさま遠くへ行ってしまった。

残るは風のみ。

「……返しちゃってよかったの？」

しばらくしてから、そう鯉六に尋ねた。するとそれは私の方を見て、へにやりと弱々しい笑みを浮かべた。

「ああ。これは違うから。そのままにしておくのも、可哀想ですよ？」

その言葉にとりあえず頷いた。鯉を釣ろうと奮闘している奴に、亀を釣ることはできそうもないなと思う。

ただ、今は鯉六観察帳を書く気にはなれなかった。

「……鯉六さんは、どこかの御伽話だったの？」

「さあ。そうかもね」

それは、主人公の名前も、題名すらも忘れられた物語。

時代に流れ去った御伽話。

「見つからないの？」

「誰からも、これと言った話が聞けないんだ。……このまま消えるのかもね」

締まりのない笑顔は、どこか遠くにいるようで。少し寂しそうに見える。

私はそれに向けていた視線を、ゆっくりとノートに移した。そしてペンを持ち直して、鯉六を見た。

「……いいネタだね」

「へ？」

キョトンとした顔をしている。その表情も、もちろんメモする。記録しておくに越したことはない。

そして、再び鯉六を見つめた。ニヤツと目を細めて。

「だったら私が代わりに作ってあげるよ」

なくなったら作ればいい。作り直せばいい。それでもいいなら、この物語は世界となる。誰かに語り継いでもらえれば、誰かの記憶に残れば、それは御伽話だろう。

「だから作るよ。これは鯉六さんの、いや、鯉六の御伽噺だ」

『忘れじのボーレン・ピアース』

西谷墨白

ある夕暮れの方のことである。一人の転生者は、ありふれた部族の前に姿を表した。

転生者は、かつての記憶に清々したかのように、入道雲で紫がかる空を見つめ、薄汚れた暗く閉じた横穴の傍らでぐったりしたように、小さな雑草を三本の指で抜いている。夕暮れを通知する代わりに、ファスナーのような鳴き声をするクラスたちが、雨を避けよ避けよと、キーキー飛び回り始めた。

今日という日、この部族は衰退の一途を辿っており、その陋習や怠慢は言うまでもない。かつて名産品であった楽器たちは、今や安値で最初の雑魚武器として取引され、まるでアフリカの力力オ農場のような有様であった。工房には埃が積もり、弦は錆び、笛は五分に割れ、音を知る者は古い、音を学ぶ者は育たない。幼子が歌を覚えるより先に棍棒の振り方を教えられ、祭礼は信仰ではなく見世物へと成り下がり、音楽は人を結び付ける術ではなく、他者を出し抜くための道具へと変質して久しかった。

そんな惨状のこの部族、ひいては部族間に於いて、宗派間の倫理観はとうに肥溜めの蓋の裏に張り付き、人を集めては欺き主義

の押しつけを始め、異端審問で不要な苦痛を与えることが自治のトレンドである。メロディー一つ、調律一つを巡って争いが起こり、異なる歌い方をしただけで異教徒の烙印を押され惨殺されることは当然である。昨日まで聖なる音であったものが、境を越えれば禁忌となる。音律も楽典も宗教も互いに歩み寄ることなく、長い年月をかけて微かに分ちて、枝分かれし、互いを理解する術そのものを失っていた。音楽の国際性というものは無いに等しいと言つてよい。

即ち、この世界では一つの流派を極めた達人よりも、あらゆる楽器を扱い、あらゆる音律を理解し、あらゆる宗派の楽曲を演奏できる者こそが、部族と部族を結ぶ唯一の通訳であり、文化を繋ぎ止める最後の希望であった。どの宗派にも属さず、どの音律にも縛られず、誰とでも共に演奏できる者は、戦を止め、交易を生み、失われた知識を運ぶ可能性を秘めている。大きく十三個に分けられた忌み深い部族たち、それらのすべてを弾きこなせる人間のみが、理論上の銀の弾丸なのである。その為、この世で「ミュージシャン」と呼ばれた転生者は、この部族にとっては喉から手が出るほど欲しい存在だった。

転生者は、己が異邦人であることをまだ十分には理解していなかった。いや、理解しようとしなかったと言う方が正しい。見慣れ

ぬ山肌も、聞き慣れぬ鳥の声も、しばらくは胸を躍らせる舞台装置にすぎなかった。前世で積み重ねた煩わしさが、一冊の本を閉じるように終わったのだと信じたかったのである。草を弄り、土壁に寄りかかり、空を眺めるだけで、どこか救われたような気がしていた。

だが、その楽しい現実逃避も長くは続かなかった。

転生者は薄々気づいていた。昨日まであった街並みが、もうないことを。当然あったインフラも、隣人も、もう遠いことを。思い出そうとすればするほど記憶は輪郭だけを残し、肝心な温度を失っていく。転生という言葉は華々しいが、その実態は一本だけ橋を焼き落とされた旅人にも等しい。来た道は失われ、行く先は霧に覆われている。そうした、行くあてのないどうしようもなさや、夕焼けの色を少しずつ鈍らせていった。

最初は葉先を濡らす程度だった雨粒が、やがて土を叩き、横穴の入口を暗く染める。遠くで鳴っていたカラスも姿を消し、湿った空気だけが岩肌を這い回る。雨音には不思議な規則があるようでいて、決して耳に馴染む規則ではない。一滴ごとに均等なようで、どこか一つだけ噛み合わない歯車が混じっているような、不安定な連なりであった。転生者はその違和を言葉にできぬまま、ただぐったりとふんぞり返っていた。

四十歩ほど先までなら見渡せる。しかし、その先へ踏み出すには、あと一歩だけ足りない。そんな感覚が胸の内に沈殿していた。石ころはどれも丸く見えるのに、一つだけ僅かに角度の異なる石が紛れ込んでいるような、整っているはずの景色へ小さな亀裂が走っているような――その説明し難い違和感は、彼自身がこの世界へ混じり切れていない証左でもあった。

それでも転生者は、横穴から立ち去らなかった。立ち去る理由も、立ち去る場所もなかったからである。雨は尚降り続き、夕暮れは静かに夜へ折り畳まれてゆく。その閉ざされた空気の何処かで、まだ誰も知らない音が、誰にも気付かれぬまま息を潜めていた。

ふと、寄り掛かっていた土壁の脇へ、奇妙な弦の張られた木製の道具が立て掛けられていることに気付いた。瓢箪と木箱を継ぎ合わせたような胴に、長く細い首。見たこともない代物である。恐る恐る一本、指で弾いた。

高く鳴るはずの音は、どこか期待を裏切る場所へ着地した。さらに別の弦を鳴らすと、似ているようで決して重ならない。上へ昇って元へ戻る、その当たり前の輪が、何処かで僅かに食い違っている。階段を上り切ったと思えば、最後の一段だけ床の高さが違っているような、不気味な感覚だけが耳に残った。

そうこうして遊んでいると、転生者は、雨幕の向こうに立つ一人の男へようやく気が付いた。過剰に痩せ細り、骨ばった頬を雨に濡らしながら、緑色の靴を履き、黒い着物にも見える衣をまとっている。髪は几帳面に七三へ分けられているというのに、口元には手入れを放棄した無精髭が広がり、その均整の悪さが却って異様であった。男は傘も差さず、ただそこへ突っ立っている。左手には一本の刃物が握られていた。

男は漫ろな足取りで近付いてくる。何も知らない転生者は、その姿を見ただけで、理由もなく鳥肌が立った。危険を知っているのは頭ではなく、もっと古い器官なのだろう。

「そこで何をしている」

次の瞬間には、冷たい刃が喉仏へ触れていた。呼吸一つで皮膚が裂けそうだった。咄嗟に転生者は言い訳を始める。

「私はこの世界に転生してきました。それ故、この世界の勝手が分かりませぬ。この異様な弦楽器も、あなたのその服装も、そもそもこの景色自体も、全く私の記憶にあるものではありません」

転生者はこんなようなことを言った。男は眉一つ動かさない。その眼差しには怒りよりも軽蔑があった。泥を見下ろすような、救う価値すら量っていない目である。

「一度見た気がする。どこだったか。夢か、昔話か。忘れた。だが、

その目だけは気に入らねえ」

刃先が僅かに押し込まれる。

「お前らは決まって、向こう側から来たと言う。そして境目を壊す」

転生者には何のことか分からない。

遠くで鐘のような音が鳴った。男は一瞬だけ顔をしかめる。

「三つで閉じる道を、二つで閉じようとする愚か者どもが昔いた」

それだけ言うと男は空を見上げた。そして屍でも齧ったかのような顔で語り出す。

「四十一の石を円に並べ、五つ飛ばしで歩けば、古い歌へ辿り着く。だが、それは神へ近付くための橋じゃねえ。橋だと思い込んだ連中が、互いの血で川を赤くした」

まるで童話でも語るような口調だった。しかし何故か、心当たりがあった。

四十一。

五つ飛ばし。

どこかで聞いたような、聞いてはならなかったような数字である。男もまた、その数字を口にした瞬間だけ、自らの言葉へ怯える。

るように黙り込んだ。己もまた、その御伽話を信じ切れていないのであろう。

「忘れろ。お前がその続きを探せば、また同じ争いが始まる」

転生者は何も答えられない。答える資格すら無いように思えた。思考が渦巻く。困惑に近いような感情である。

ブシャッ、刃が閃いた。

熱とも冷たさとも違う衝撃が左の太腿を貫き、一拍遅れて激痛が押し寄せる。衣が裂け、血が雨へ滲み、赤はすぐに泥へ溶けた。

「死なせる価値もない」

男はそのようなことを言い、刃の血を雨へ晒すと、振り返ることもなく灰色の雨幕へ歩き出した。痛みに呻いていると、もう男は姿を消していた。

転生者は吐き気を催していた。刃物で傷ついたことなどない現代人にとって、このような量の出血は低ヘモグロビン、低酸素によって強い目眩を引き起こす。余りの倦怠感に暫く転生者は俯いて放心状態だった。

〈小説〉忘れじのボーレン・ピアース

やがて雨は止んだ。一匹の鈴虫が血に濡れた足へ飛び乗り、静かな声で鳴いた。見上げれば、雲は裂け、夜空いっぱい星が散っている。転生者は傷を引き摺りながら横穴を出た。そして思わ

ず足を止める。

横穴は切り立った崖の中腹に口を開けていた。道などどこにもない。ならば、あの男はどこから現れ、どこへ消えたのであろうか。この世界は十三の部族に分かれ、それぞれが互いを拒み合っていた。一つを知る者は歓迎される。しかし全てを知る者は歓迎されない。部族を結ぶ者は争いを終わらせる希望であると同時に、境界そのものを曖昧にする災いでもあるからだ。

だから、この世で最も価値ある異邦人は、この世で最も居場所のない異邦人でもあった。

転生者はようやく理解した。

自分が求められていたのではない。

利用されることだけを求められていたのである。

木の葉が弦を弾き、奇妙な音色を奏でる。

何処かで鐘がなったようだ。

そして、この崖は風化し、小石の落ちる音が、ここの共鳴体に轟いた。

転生者の行方は、誰も知らない。

その後、十三の部族は長い年月を経ても争いをやめず、境目は尚残り続けたという。

〈小説〉 忘れじのボーレン・ピアース

花瀬文寧

おとぎ話に登場するプリンセスは、何時だって、どんな姿だって綺麗で、完璧で。まるで、女の子のあるべき姿みたいに描かれるけど。

もちろん、私にだってそれに見ていた時期もあったのだけ
れど……。

ふとした瞬間に他人に撮られた自分の姿とか。鏡に映った自分の顔とか。全部全部、プリンセスと呼ぶには程遠くて。いつからか、自分の価値を自分で下げるような言葉を、よく口に出すようになっていた。

だけど、心だけは美しくあろう、なんて自分を奮い立たせて。きつといつか、私だけの王子様が私を迎えに来る。……なんて、馬鹿みたいだけど。

幼い頃の私は、ただ、それだけを盲信して生きてきたの。

それなのに、おとぎ話の中のプリンセスたちは何があろうと、決まってる王子様と運命のような恋に落ちる。そしてそれは、いつだってハッピーエンド。

何度も何度もその物語を見るうちにね、なんだか私、この人生に飽きてきちゃったの。

ああ、私の人生はおとぎ話のプリンセスみたいに甘くはないんだ

な、って、嫌でも気付いちゃって。

……ほら、よくあるでしょ？ 見始めた恋愛ドラマで、ああ、きつとこの二人が結ばれるんだろうな、みたいな。そしてそれが分かってしまった時の、ほんの少しの絶望感、みたいな。使い古された、典型的なラブストーリーの筋書き通りに進む話。なんの面白みもない、愛は幸福の元なのよ、みたいなことを伝えたいだけの馬鹿話。

でも、私たちはそれを自然と恋愛の理想と捉えてしまうのだから、滑稽よね。そうして、私もその型通りの恋愛を、って無意識に考えて。型通りじゃない、王子様じゃない行動に幻滅してしまったり、違和感を抱いてしまったり……。

そんな自分の心に、考え方に気が付いたとき、私って汚いな、って思っちゃったの。こんなにも汚い感情と考えるのに、表面上の私はみんなに良い顔して。善人に擬態して。何重にも嘘を重ねて。

へラへラと笑った私の本心なんて、みんな知らないでしょ？ 分からないでしょ？

私って所詮、主役であるプリンセスを引き立てる村娘。私は外見がいいわけでも、性格がいいわけでもないけれど。外面だけは完璧だからみんなの中の共通のいい子、として今まで育ってきて。貴女は私たちのプリンセスよ。王子様と結ばれるのはきつと貴女ね。なんて期待させるようなことを大勢から言われては、物語の

最後、本物のプリンセスにその役を取られちゃうような、悲しい運命なの。

でもね、そんなことを考えちゃう私が、私はこの世で一番、嫌いで。そんな真っ黒い感情から次々と溢れ出るのは、醜い嫉妬心と無意味な劣等感ばかり……。

『こんな汚い私が恋愛したいとか、身の程知らずにもほどがあるでしょ。』

そうしてある日、私の口から思わず零れ出た言葉は、あまりにも正しすぎたの。

私、そのあと何も言えなかった。いや、何も考えたくなくなっちゃった。

だからね、私はもうこれ以上、馬鹿な夢は見ないようにって。

おとぎ話なんて所詮、ただの夢物語だって、毎晩、自分自身に言い聞かせた。

Once upon a time……

Dreams faded with time

「あ、捕まっちゃった。」

左手首に絡まった、有線イヤホン。見せつけるみたいに掲げてみ

て、一人で笑う。

私の運命の人は、スマホの中の貴方ですか？

……なんて。ほんと、バカみたい。

絡まったイヤホンの線をあえて焦らして、スマホの中の彼と目を合わせる。イヤホンから聞こえてくるのは、もう聞きなれてしまった貴方の歌声……。

こうしているとなんだか、この世界が二人だけのものになったかのように感じる。

そんなのあり得ない話だって、分かっているけど。その感覚すらも楽しくて。愛おしくて。段々と近づいていく、大きなライブ会場の入り口を前に、私はひっそりと微笑んだ。

ああ、こうしてみると、私ってほんと……。

『一年前、アイドルである貴方をテレビ越しに一目見た時から私、どうしようもなく貴方に恋してる。』

だって、貴方の、ロングヘアの女の子が好きという言葉一つで、私は今まで無頓着だった髪のアヘアヘアも始めて。ことあるごとに貴方のメインカラーであるピンク色の物を買ってしまうものだから、私の部屋はピンク一色になって……。

私の人生はすべて、貴方で出来ている。そう言っても過言ではないくらいに、今の私の思考と行動は、貴方で支配されていて。貴方は私の生きる希望であり、道標なの。

……思えばね、貴方という、絶対に手の届かない相手に恋をし

てからは私、随分とこの世界が生きやすくなった。

それまでの私は、恋なんてしないと誓ったくせに動いてしまう心を力づくで押し殺して。夢を見ることすらも制限してきた。

だけど、貴方に出会って気付いたの。私は、何か媒介がないと貴方の姿を認識できない。それってつまり、貴方はこの“現実世界”に存在していながら、私が目をつぶってしまえばいとも簡単に、“私の世界”には存在していないことになるってことでしょう？

……だからね、私はそれを利用することにしたの。貴方に恋をしていると錯覚してるうちは、現実の自分自身の醜さに気付くことなんてないから。出来ないから。どれだけ私が貴方を求めて、恋焦がれたって、貴方は私の名前どころか、私という人間がこの世界に存在していることすらも知らない。

そうして、私はね、貴方に恋をすることで私自身をコントロールしようと思ったの。

苦い現実を上手に生きていくために。もう二度と、馬鹿な夢に恋焦がれて時間を無駄にしないために。そして、私自身を守るために。

……だけどね、最近はそのが、少しばかり苦しく感じてしまっているのよ。

ざわざわと騒がしい会場内。アリーナ席の通路側。隣には二人組の可愛い女の子。

ああ、なんだか息苦しい。心臓のあたりが妙に重くて、ペンライトを持つ指先から、全身の力が抜けてゆきそう。そうして私の自信と彼への想いとは、隣の彼女達へと吸い込まれて行つて、最後に私の中に残るのはあの幼い頃の醜い劣等感だけなんじゃないかしら……。

どこからともなく、そんな訳の分からない恐怖心が渦巻いてきて。この会場の熱気と心の奥底から漏れ出てくる恐怖心とで、私は今にも飲み込まれそうだった。

力をなくしていく掌を、ぎゅっと握りしめて。目をつぶって一つ、深呼吸。

『大丈夫。大丈夫だから。』

心の中で、そんな祈りにも似た言葉をそっと呟く。

……でも、何に對して？

響きだす音楽。駆け巡るスポットライト。そして、大きなスクリーンに映し出されるのは、大好きな貴方。

『私は、この時をずっと、待ち望んだ。』

唇が、手が、震える。ああ……漸く、画面の中の貴方じゃなくなった。

『私、貴方と同じ今を生きてる。』

思わず溢れ出た言葉たち。けれどそんな甘い言葉とは裏腹に、私は、ステージから降りてくる貴方を見つめながら、貴方のために買った、貴方好みのワンピースの胸元を強く、右手で握りしめていた――。

愛されたい、愛されたい、愛されたい。ただそれだけを、幸福だと信じて。そうしないと私、この現実を生きてゆけそうにないから。

『ねえ、神様。私、何か悪いことしました?』

受け取るだけの幸福じゃ、なんだか物足りないの。だから、違うものに幸福という価値を付け足して。手元の幸福は増えたはずなのに、苦しい。苦しい。

貴女、幸福で息が吸えなくなったの? いいえ、違います。だって、私はまだ、満たされてない。

ねえ、なんでこんなに苦しいの?

本気にならないって決めたのに。

私、愛に飢えて愛に生きられるほど、健全な脳みそは生憎、持ち合わせていないのよ。……だって、そうでしょ? まともだったら、こんなことなんて一生考えず、そして気付かず。ただ、幸福は幸福だと、馬鹿の一つ覚えみたいに繰り返すだけ。

でもね、私、知ってるの。

私は今、楽園で生きているということ。それなのに私は、もっと

多くの幸福を望み、愛を望み、更には天国をも望む……。それはきっと、悪いこと。だって、本能が私にそう訴えかけているもの。

ねえ、だけど一つ、聞いてもいい?

そうやって望んでばかりの悪い子は、死んだら地獄に行くんですか?

きっと、多くの人はそうだよと答えるんでしょうね。死んだら地獄行き。だから欲張っちゃいけません、って。だけど私はもう、純粹無垢な村娘じゃなくなったの。私はもう、自分が本当のお姫様だって、勘違いするほど馬鹿じゃない。

本当の地獄は、ここにある。それはね、きっと私の脳みそ。硬い頭蓋骨で守られた、私自身。私のすべて。

だからね、私が切望する、その先も――。

目の前には、私がずっと恋焦がれていた貴方。

「俺も愛してる。」

そう言った彼の瞳に映るのは、目を見開いて固まる不細工な私とファンサをしてもらうためのうちわ。愛してる、なんて言葉の

書かれたそれは、私の今までの人生のすべてで、今の私から彼への、精一杯の愛の言葉。

でも、私がその瞬間思ったのは、感動でも、幸福感でもなく……。

『ああ、昔私が夢見てた王子さまは、私一人だけのものじゃなかったみたい。』

なんていう、ごく当たり前のことだった。

彼は、この瞬間だけの、何万、何百万人のための王子様。そうして彼は、何処か機械的で、使い回しの甘い台詞を私に囁くの。

……だけだね、それはただの言葉であって、真実の愛じゃない。ただの、文字の羅列。

『ねえ、私は一体、何を……？』

私は手にしていたうちわをぎゅっと強く握りしめる。そうして、出会った時と同じように、美しい眼差しで私だけを見つめる彼を、私もまっすぐ見つめ返して。

時が止まったかのような錯覚に引き込まれたなら、あとはその夢に溺れるだけ。

ねえ、私、覚悟はできてるから。だからね、私を永遠に、その夢から目覚めさせないで。

この甘い毒を飲み干して。行き着く先は果たして天国か。それとも、地獄か。

でももう、正気じゃいられないまでに私……。

〈小説〉 Idolatry of the heart

『水泡に帰す』

及川 まよ

視界が開ける。確かに自分がここに存在しているという実感があつた。上体を起こして足を動かそうとして、前へつんのめる。久しぶりのこの感覚は、足がないときの感覚だ。息を吐くと、数個気泡があふれた。もしかして、と喉に手を当て、動かす。自分の中で声が反響して、耳まで届く。私は今、喋れている。

この状況を受け容れるのに、思ったより時間はかからなかった。私は人魚の姉妹の末っ子の姫であり、当たり前のように人間にはなれず、それでも人間に恋をしてしまう愚かな分際であること。その末路が、泡になることだったこと、あのとき私はもう消え去ったと思ったが、どうやら戻ってこれたらしい、ということ。否、泡から人魚になったのか。

「おはよう。随分長く寝ていたのね」

聞き覚えのある声に反射的に姉様、とこぼす。呼べた。安心で一度詰まった息を一杯吐いた。

「朝食できてるわよ。そろそろ起きなさいね」

「はい！」

自分の髪を捧げて私を助けようとしてくれたお姉様たちの髪が元の長さになっているのを見て、私は「替わった」のではなく「戻った」だけなのだと確信した。前世というものだろうか。にしては記憶が保持されているようだが。一番最初に蘇る泡になる前の私の記憶は、もちろん王子様だ。私たちが出会う前に戻っているのなら、もう一度会えないだろうか。泡になる間際まで声は出なくとも見詰め続けていたその顔を、また目にしたくなってしまった。一緒にいた時間というものは、いれなくなった時間の苦しみを増していくものだ。

久しぶりの海中の朝食を食べて、ああやっぱりこの食事が一番私の口に合うなんて思いながら、あのとき王子様が乗った船を見つけた海まで出かける。暗がりにあった海は、まさに嵐に巻き込まれたあの日の海を彷彿とさせた。忘れもしない、あの嵐の中どうにか助けた彼の、目を焼くような美しさを。

波が激しくなってきたころ。そろそろ帰った方がいいんじゃないかなんて恐さに蓋をし、船の影がないか、暗い海をひたすら見渡し続ける。それでもどこかで苦しんでいるのなら、また助けるのは私がいい。そう波を掻き分けた先で、やっと大きな船の一角が見

えた。急いで向かうと、案の定今にも転覆しそうである。

やがて落ちてきた数人を無視して、見覚えのある純白のジャケットを見つける。ショックか酸欠か、既に目を閉じていた彼を少し勢いをつけて肩を組むようにキャッチする。一番近かった岸も、あのときと同じ。彼の住む国の隣国の砂浜だった。必死で水面から顔を出し、彼の身体を自分の身体で押して打ち上げる。全身ずぶ濡れではいるが、どうにか息はありそうだ。あとは身体が冷えないようにと思ったが、生憎質のいい羽織など持ち合わせていない。砂浜の奥から誰かの足音がして、私は岩陰に隠れることしかできなかった。

（これじゃあ前と変わらないじゃないか）

隠れて初めて気づいてしまう。そして嫌でも次の展開まで。

「大丈夫ですか!？」

知っている声だ。私がずっと求めていた、これさえあればよかったはずの声だ。何度この声に苦しめられたのだろう。

—— 最終的に彼と結婚したあの人の声。

どうしようもなくて、私は弾かれるように海の底へ帰っていた。

情けない。まさかこの瞬間をまた味わうことになるなんて。どうして前世の私に戻るなんてことになってしまったんだ。同じことを繰り返してまた泡になるだなんて、そんなの御免だ。そんなことのために転生したわけがない。これを最後のチャンスだとするならば、この状況をそのまま享受するだけでは駄目だ。変えられるのは、この後の私を知っている私だけのはずなのだ。

そう考え始めてからは早かった。いつまでもあの隣国の姫を僻むのはやめにして、私が選ばれる未来を掴まなければ。前の私はこの後人間になるために魔女の下へ向かった。だが今思うとあれがかなり間違っていたんじゃないかと思う。魔女に頼ったってあの人は勝てなかった。その事実が揺らぐことはない。つまり同じ選択はもうできない。私の声を筆頭に何を犠牲にしたって最後には泡になるしかなかったなら、その犠牲は全て不必要だ。犠牲なしに王子様をこちらへ向かせるには？ あの人が助けたなんて勘違いを正すには？ それを伝える方法は、その証拠は……そこまで考えて、私は辺りを見渡した。いつの間にか家よりずっと深い場所へいたらしい。確か魔女が住んでいたのもこのくらい深海だった。

魔女に会いに行った当時の記憶が鮮明に流れ込んでくる。魔女に何かを捧げたのは私だけじゃなかった。最期、あの人と王子様

が結婚することになり泡になることを逃れられなくなった私をどうにか生かそうと彼を刺すためのナイフを調達してきたお姉様たち。肩の上までばっさりと切られたその髪は魔女にナイフの交換条件として捧げたと。姉たちの髪という犠牲を無意味にしたのは私だ。でもそれと同時に、私たちから声と髪を奪って、そのままのうのと暮らしていたのは魔女だ。徒労感と悔しさに深海の重苦しい水圧を感じて、耐えつつ私はもう一度この生をやり直してやっと思える。

（魔女だけが全てを得て、私たちは何もかもを犠牲にして失ってしまったんだ）

ここまでのものを犠牲にしてまで得られなかったハッピーエンドだ。でも逆に、ハッピーエンドにこれ程の犠牲は不要だったとも言えないだろうか。何の犠牲を出さずに成功するに必要なものは何なのか？ 水面の方へ少しずつ戻りながら私は考えを巡らせた。ここまで来て、何もせずに同じ道を辿ってなんていられない。

前回の私に足りなかったものは何か。行動を一つ一つ思い返すのも苦しいが、できる限り鮮明に思い出してみる。まず魔女に最初から頼ったのがいけない。私に圧倒的に足りていなかったのは、十分な量の努力、そして運だ。今の私にそれが向いているとは思え

ない。それでも、努力を重ねた先の私はまだ未知なら、できるどころまでやり切る価値はありそう。

（私ができる努力ってなんだ）

瞬間差した光の束は、太陽の強すぎる光をスポットライトにしたように私を照らす。思わず目を細めると、白飛びした視界が一度目の奥ではじけ飛んだ。

「——これしかない」

私は勢いよく尾鰭を翻した。

翌朝。目を覚ました私はお姉様たちが起きる前にここより家を抜け出した。一直線に向かうは隣国の近海。あの人は王子様に今日も会いに行くだろう。こんなに穏やかな出航日和だからだ。わかるよ、だって私も会いたいから。私が会いたいようにあの人も会いたいのなら、この気持ちを踏み躪ったあの人に同じことをしてもいいだろう。そのための努力をするなら、私は許されるだろう。だってあの人が許されたんだから。

何度も王子の部屋から見た船。王子のものほどじゃなくとも豪勢で一目でわかるそれは、まだ係留状態だった。こんな早朝だ。どうせ城中で優雅な朝食でも取っているのだろう。船の下へ潜り

込む。やけに温かい海水が私の背を押すようで、疲れから重くなる腕が少しばかり軽くなる。

何分経っただろうか。船が少し傾くと、頭上から複数人の声が出た。ついに船が出る。耳を澄ますとあの人の声も聞こえてきた。声が低い。私は今まであの人の、王子様の前での声しか聴いたことがなかった。やがて動き出した船の下から、デッキの後方へ隠れて移動しておく。方向はもちろん解っている。そして王子様の城へ向かう船の先端、小さなデッキに立ったあの人は海風を浴びて城を見つめているのがわかった。これから王子様に会って話して笑い合えることを信じて疑わない爽やかな笑みを頬に浮かべて。そんな当たり前のことさえ許されなかった私は未だ真下からそれを見つめることしかできない。ただ、それももう最後にしよう。

最後まで努力を重ねたら、あなたの当たり前を奪えるというこの証明を。

勢いをつけ、私は船の先端を掴み、一気に下降した。潜る体がいかに重かったのは初めてだ。ただ、それでよかった。深度二メートルで手放した船は、勢いよく上昇していく。計画はまだ終わっていない。勢いを全身で殺して反転すると、船の上昇スピード

を追いつき垂らされた縄を掴み、一度尾鰭を打ち付け海面へ顔を出す。突然の大きな揺れにただ柵にへばりつくことしかできないあの人の足首に手を伸ばして――ギリギリで掴めた。悲鳴が耳を刺す。地上のこの音の大きさにはいつまでも慣れないものだ。それでもこの努力を無下にしたいことなく、そのまま私の手を振り払おうとする憎たらしいほど綺麗なドレスの裾を引き込んだ。私にも足があればこんな綺麗なドレスを着れたのだろうか。

努力は裏切らない。私はこうやってハッピーエンドを迎えるために生まれ変わって、また私になったんだ。そう信じることでしかない展開に、あの人の口から漏れた最後の水泡を振り払う。さて次はどうしよう。私が求めていた幸せは、こんな場所にあるわけがないのに。努力は無駄になんてならないはずなのに。

この空虚感の出所は何処だろう。

『アイノウ』

おとり草氏

むかしむかし、君はメロンパンがメロンのパンだと信じていたことはあるかい？ ……………うん？ たい焼きを、焼いた鯛だと思っていたことなら…………ある？ あつはは！ そうかい、そうかい。まあ、本質に違いはないし、同じことさ。…………あ、なんでそんなこと聞くのかって顔だね。別に深い意味はないよ。言うなれば、事前アンケートみたいなものさ。だから一々深く考えず、君の思うままにすればいい。…………ただ、どうか自分に正直に。

「」を祈っているよ。

——しやりしやりしやりしやり、しやりしやりしやりしやり、しやりしやりしやりしやり——

(…………うゝ…………ん、あと五分だけ…………)

——しやりしやりしやりしやり、しやりしやりしやりしやり、しやりしやりしやりしやり——

(…………だからあと五分だけだって…………)

——しやりしやりしやりしやり、しやりしやりしやりしやり、しやりしやりしやりしやり——

「…………さっきからうるさいな…………！」

板前にリングでも桂剥きさせてるのかよ。ともかく、騒音に限界を感じた俺は、まずは布団を剥がそうと手を顔の近くへ寄せる。——瞬間、顎の下からゴリング、という衝撃が響いた。

「いったあ！？ なにが当たっ…………て…………！」

驚くのも束の間、フレッシュな果汁が目の前に広がる。大自然の香りに呆然としながら自分の腕を見ると、サッカーボールくらいあるデカリングが付いていた。その信じられない光景を目にした俺の脳内に、とある一つの単語が浮かんできた。しかし、それはあまりに幼稚で…………かつオヤジ臭い——

「——アプルウオッチ…………？」

口にした瞬間、まるで正解を告げるように、棚の上の桃(?)がおはようございます、おはようございます。と無機質に繰り返す。ついでにライトもいじっているようで、怪盗のように照らされ

た俺は腕で顔を覆う。そのはずみでリングはどこかへ飛んだ。

「……まさか、シリ……」

次にハトがクルッポー、と時計から明日へ飛び立った時点で俺は理解を諦めた。考えるだけ無駄、そんな気がする。……うん。どうせ目覚ましと変わらないんだから。そう、ただ目覚ましは何度も……ん？ ……なん……ども……

「……………今何時？」

首を秒針と連動してがくがくと動かし、背後の時計を確認する。

「……………よし！」

これが寝坊か！ なんて感動する声が部屋に響いた――

トボトボと階段を降りてリビングに入ると、呆れたような母の視線と、テレビを食い入るように見ている父の背中が目に入った。どうやらニュース番組を見ているらしい。

「……私はちゃんと起こそうとしたんだからね。なのに、あんたは

何回名前を読んでも起きないんだから……」

俺はごめんごめん、と平謝りしながらテーブルに着く。そして、忘れていたのおはよう、と声をかけた。すると母は眉を下げて笑うと、目の前にジャムとパンを置いて、

「おはよう、祐介」

と返してくる。隣にいた父さんも俺を振り返っておはよう、と声をかけてきた。先ほどの地獄とは違い、普段と変わらない様子に安心する。……………それはそれとして、奥にある目玉焼き（？）は無視だ。絶対に。

うん。ニュースでも見て気でも紛らわせよう。

『本日未明、午後の紅茶を午前に服用したとして――』

『大量発生したフライドポテトが日本上空を――』

『大谷選手がホームランを決めアメリカから実家に――』

『ロケットペンスルの打ち上げが成功し大気圏へ――』

様子のおかしい情報が右から左へと流れていく。……これはこれで面白いのかもしれない。

「あ、そうそう」

母さんが思い出したようにこちらを見る。きっとレストランが休む走る、とか平穩(?)な内容なんだろう。

「どうしたの？」

「愛をなくしちゃったから探してくれない？」

……前言撤回。やっぱり皆おかしいのかもしれない。

「テーブルの上にあつたはずなんだけどね」

いつから愛はテレビのリモコンみたいになったんだろうか。……

…というか、愛をなくすって何が起きるんだ？

疑問に答えるようにニュースのトピックが変わる。

『えー、先程、アンパン男の引退が発表されました。声明によりまずと、無二の友人である愛さんを失ったこと、そして、そもそも菌にパンで挑む意味がわからないとー』

『現在、愛知県と愛媛県が独立戦争中です。原因は、愛さんが知、姫さんそれぞれと関係を持っていたことが発覚し、結果、方向性のちがいでー』

『二十四時間テレビのテーマが、愛は世界を巢食うのか？ に変更になりました。関係者一同、最後に愛は勝つ。など意味不明なー』

「……へー、大変だなあ」

父さんの呑気な声に流されかけるが、絶対におかしい。ここでは愛は実体を手に入れたのか？ 起こっていることに法則性がない。いや、そもそもなんで俺が探し出せると思ってるんだ。

「そうね。はい、お弁当」

「……あ、ありがとう」

俺が止まっても世界は回る。あまりの自然さに受け取ってしまった。……どうやら学校には行かなくてはいけないようだ。すると、父さんが羨ましそうに俺を見ていた。

「ね、僕にはないの？」

「……………はあ？ 休みなんだし……自分で作れば？」

部屋が氷河期に包まれ、空気がビシリと凍る。すると父さんは涙目で俺を振り返りながら懇願した。

「祐介、速く愛を見つけてきてくれ！」

「それは元からかも！ 行ってきます！」

「……………ええ。行つてらっしゃい」

一人の高校生が別れを告げると、それまで人の形をしていたソレらは、元から存在していなかったように地面へ染み渡っていく。その黒影は、まるで祈るような十字を描き、そのままポツポツと溶けていった。

『——それでは、本日の予報です。小学生の桜リンちゃん。教師の国枝新之助さん。獵友会の田中友蔵さん——』

明日の予報は、と続いたところで、リモコンを失ったテレビは、糖分を失った脳みそのようにフェードアウトした。

「……………学校かあ……………何が起ころのやら……………」

アイノウ
ため息をつきながら、玄関のドアノブに手をかけて回すと、俺の真横から、わふ、と鳴き声が横切った。眩しい光のなかに白色の

毛が溶けていくのが見える。

「——オオカミさん！」

キリッとした目に、雪のようにふわふわな毛を携えた、我が家の愛犬だ。狼みたいだからオオカミさんである。……………ん？

「……………愛犬？」

そもそも、なぜオオカミさんはここにいるんだろうか。だって、ここは玄関だ。玄関とは外と内を繋ぐ扉で、今外に出ようとする俺を横切ったんだから……………

「——我が家のいぬ——————！」

——また一つ、愛が消えた——————

「……………えっと、誰も……………居ない？」

学校に入ったはずだが、雰囲気があるで裁判所のような。無人の廊下は静謐で物々しい。とりあえず、教室に入って自分の席につくと、黒板にチョークを突き付けている人物が現れた。肩肘張ったスーツに、角張ったメガネをかけた、御局のような出で立ち。

会った記憶はない。……………学校だし、新しい先生だろうか。

「——あら」

しかし、そんな疑念はすぐにどうでも良くなる。俺と目が合った瞬間、彼女は老婆へと姿を変えた。続けて英国紳士、サッカー少年へと形を変えていく。とんでもない変化に目を見開いていると、先生(?)は最初の御局へと戻って、期待通り、といったように笑みを深くして、

「先に生きる者、先を生きる者、それが先生です。よろしく、こんにちは、おはようございます！」

と嬉しそうに挨拶をする。目の前の肉塊が一言発するたびに、不定形な肉体はぐにやりぐにやりと変化していき、輪郭を捉えることができない。

「——さあ、前置きはこのくらいにして、新しい仲間も増えることですし、一度振り返りをしましょう。前回はマジックカットから、キレにくくなる魔法を学びましたね」

……仲間になるとか、聞き捨てならないことが聞こえた気がするが、うん、聞き捨てよう。粗大ゴミでいいかな。

「そして、今回はみんなに意見を出し合ってもらいたい！ そう思っています」

そう言って先生(?)は幼い子供へ姿を変え、両手を合わせてパチン、と鳴らす。そして俺に笑って、さあ！ と手の平を向ける。

「議題は、そう！——ハッピーエンドについて！」

それを聞いた瞬間、俺の体に電流のようなものが流れる。確信した。どうやら俺は、これに答えなければいけないらしい。……

……いや、すこし前振りと材料が足りないんじゃない？

「まずは、たとえ話をしましょう。王子に恋した人魚姫！ この娘にふさわしい結末はなんでしょう！ さあ、桜さん！」

「王子と結ばれるなんて都合が良すぎる！ そんな薄っぺらい結末じゃ人の心は動かせない！ ハッピーエンドなんか忘れちゃう！」

「では、次は亀を助けた善良な漁師！ この男に相応しい結末を！ 田中さん！」

「最後に全員報われるなどくだらない！ 作者の願望を無理やり叶えるなど笑止千万！ ハッピーエンドなんて馬鹿馬鹿しい！」
いつの間にか現れていた群衆が糾弾し始める。年齢も職業も関

係ないようで、小学生から盆栽家までいるようだ。……というか、さっきからハッピーエンドが全否定されている。そもそも話しか合っていないし減茶苦茶だ。……ただ、ここで鵜呑みにするのは本当にアウトな気がする。俺が必死に反論を考えていると、先生（は、素晴らしい！）と言いながらこちらをギョリと見向く。

「……さて、本題です。——犬を助けた天涯孤独な大学生。この男に相応しい結末は……なんだと思いますか？ 祐介くん」

周囲の視線で一気に体が重くなる。誰も口にしないが、目で物を言わせてくる。しかしその目に生氣はなく、死んだ魚みだ。……何かを言わなければいけないのに、体ばかりが震えている。……どうすれば——

「——そこに愛はあるんか？」

「（オ）オカミさん！？」

突然、白い塊が天井をぶち破ってきた。ぽすん、という衝撃のおかげか、少しだけ体が軽くなる。驚きで動けない間、参上！と言わんばかりのキリッとした目と見つめ合う。……いや出オチ感すご。これがやりたかったただけだろ。

「そこに愛はあるんか？」

……これしか言わないつもりなのだろうか。もう分かるだろうという期待の視線が俺を貫く。……ええ……。

「……………いや」

やるしかない。深呼吸と共に心を決める。どんなに稚拙でも、自分の心に正直に。

「確かに、ハッピーエンドは薄べらいのかも知れない。くだらなくて、笑い飛ばしたくなることだってある。でも、それが幸せなんだと俺は思う。都合が良すぎる？ そうやって笑えるくらいがちょうどいい！ 記憶に残らない？ 幸せは失ってから気づくとか言うんだろ！ ……だから——」

「……そこに愛はあるんか？」

「……うん。結末は、やっぱり愛でたし愛でたじゃないと！」

そう答えた瞬間、辺りが白い光に包まれていく。その白色光がなんだか暖かくて、俺はそのまま目を閉じてしまった——

——しゃりしゃりしゃりしゃり、しゃりしゃりしゃりしゃり——

(……………ん……………?)

目を開いた瞬間、真っ白な空間に放り出される。辺りを見回すと、真っ赤な耳のウサギと目が合った。見つめ合う中でもう一匹数を増やしたそれは、まるで看取るように列をなしている。

——しやりしやりしやりしやり、しやりしやりしやりしやり——

(……………りんご?)

なんとか頭を動かそうとするが、なんだか眠たくてしょうがない。後ろからピツ、ピツ、ピツ、と聞こえてくるリズムが心地よくて、一度目を閉じて確かめたところで、これが自分の心拍なのだと気づいた。……………心拍? そんなのまるで心電図——

「……………いや……………(こどこ)——」 「——ようすけっ!？」

電車が走ったような音圧を感じて目を見開くと、天井に突き刺さった果物ナイフと、脱兎の如くそこらに散乱したリングたちが映る。それに、なにより——

「——ゆうき? どうしてここに……………ってうわっ!」

目の前にいた彼は、泣きそうな顔を一瞬見せると、すぐに俺の視界から消えた。……………つまり、端的に言えば……………抱きつか

れたらしい。……………ん? あー、悠貴との関係性は……………えっと……………

そうだな。——アイ棒……………とか? ははっ。……………まあ、そんなことはどうでもいい。腕の中で震える肩をぼんぼんと叩いて落ちて着かせる。そして、人が来る前にそっと離れた。

その後、聴診器を抱えた医者が入ってきて、突き刺さった果物ナイフにドン引きしながら、俺の状況を説明してくれた。道路に飛び出した犬を助けて車に轢かれたこと(?)。今日目覚めなければ明日には死んでいたこと(?)。どうにも頭が痛くなることを聞いているうちに、自分の胃がぐぐぐ、と悲鳴をあげた。

「……………ん? あ、へへ……………お腹、空いてる? ……じゃあ僕が食べようと思つたこれ、あげる」

そういつて差し出してきたのは、表面に賽の目がこんがりついている、メロンパンだった。……………りんごはもう食べられないらしい。俺は思わず身構える。だが、意を決して端っこの方をかじった。

「……………メロンじゃない」

確かめるようにしじみ呟くと、隣から、ふはっ! という笑い声がした。俺の安堵も露知らず、悠貴は俺を見上げて続ける。

「そりゃそーじゃん。眠りすぎて変な夢でも見てた?」

「……いや、なんでもない。どっちかといえば悪夢だし」

「ふふ、そっか？ 言い方的に、メロンパンがメロンになってた(?)んでしょ？ えっ、真ん中の方が甘いとか？ ……いや、どっちかといえば端っこがまずいのかな？」

「……笑いすぎだつて。それと勢いが怖い」

「えっ！ あ、いや……………ごめん。…………その、本当に怖かったから。だって、あと五分遅かったら手遅れかも、って言われたんだよ！？二度寝じゃないんだからさあ！」

思ってもない言葉に目を丸くする。そして、俺の最初の言葉を出して、勝手に気まずくなって目をそらす。

「……………そ、そうだ……………な……………はは。……………そもそも、五分なんて短すぎるよな……………って……………ん？ お前そんな状況でリング切ってたの？」

「……………え？ ……あ、いや……………それはその……………自分よりヤバい人がいたら妙に落ち着いちゃう現象というか……………せっかくあるなら切ろうかなって……………」

〈小説〉 アイノウ

「……………はは。というか、どうしてリングなんて買ってきたんだ？」

「……………ん？ いや、買ってないよ？」

「……………はあ？」

「あつ！ そうそう！ 急にワンちゃんが目の前に出てきて、口にくわえたリングを僕に渡してきたんだよ！ その時は気にする余裕がなかったんだけど……………幻覚かなあ？」

「……………うちはペットなんて飼ったことないんだが」

「まっ、祐介が起きたんだから何でもいいよ！」

釈然としないままだったが、その後は流れるように退院の手続きが済まされた。あと五分で死にかけていたらしい、にもかかわらず、生活に支障はないらしく、気づいた時には建物の外に立っていた。燦燦と太陽に照らされながら、俺たちは進み始める

「……………ね、今度祐介のご両親に会いに行こーよ」

「……………お盆はとくに過ぎたけど」

「……………いいじゃん」

「……………うん」

——二人が歩く並木道には、春一番が吹いていた。

——いや、よかったよかった。やっぱりみんな幸せが一番だよ。発端は僕の不注意だったし、尾を引くものはなくしたけど……ま、大丈夫か！　そこに愛はあったし！

……ん？　あ、僕は一体誰なんだ。って顔だね？　まあ確かに、最初に仰々しく語っちゃったし……そうだね……

「——大神。人呼んでオオカミさん！」

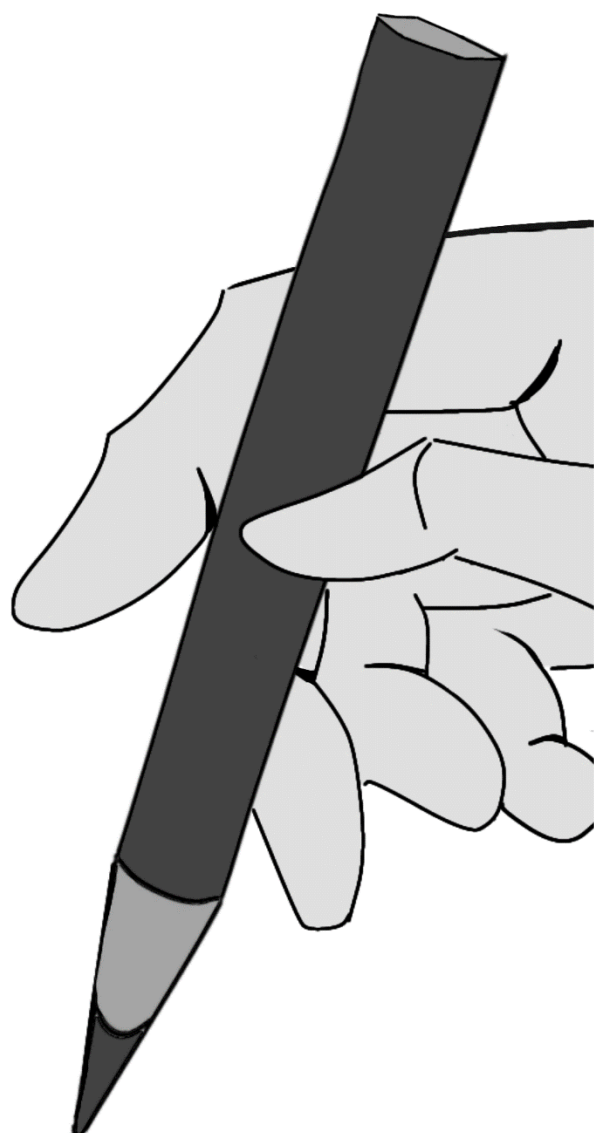
——なんてね。まあ、僕のことはどうだっていいんだ。せつかくの御伽噺なんだから。全てを理解するんじゃなくて、大事なことを理解できればオッケーさ。だから一々深く考えず、君の思うままにやればいい。……ただ、どうか自分に正直に。

……ふふ。

「ハッピーエンド」を祈っているよ。

詩

テーマ
..
名前



『しおり』

及川まよ

名付けられた日

まだ名を知らない私

名を口にした日

自分と名前を結んだ私

名を書いた日

形があると知った私

名を教えた日

君の名前を知った私

名を囁われた日

泣くに泣けなかった私

名を呼ばれた日

大きな返事をした私

名を書く手が震えた日

寒さか緊張か判らない私

名を知りたい日

あなたを知りたかった私

名を呼んだ日

汗が止まらなかった私

名を囁かれた日

あなたの声を奪いたかった私

名を半分渡した日

新たな名前を愛した私

名を考えた日

まだ見えぬあの子に呼びかけた私

名付けた日

小さな掌に握られた指に涙した私

名が増えた日

あの子に代名詞を貰った私

あの子の人生の栞に、この名前がなりますように。

願う私の名を、ほんのひとかけら渡してみようか。

『名付け親』

狭野方花

これは彼がくれた名前。

こっちは彼女がくれた名前。

どれも聞こえる響きは違つて、

どれにも「愛」が込められる。

それはきつと友好の証で、

相手との距離を測る物差し。

決まりやルールは何もない。

あなたなら、わたしにどんな名前を付ける？

『監獄』

綴歩

私たちは名も知らぬ看守に監視されている
それは誰にも知られていない存在
しかし誰もが知っている

私たちは姿も見えぬ看守に監視されている
それは誰もが幸せになるための規範
しかし誰も幸せにはなれない

私たちは最も崇高な看守に監視されている
それは誰もが守る神々しいほどの法廷
しかし誰かを守ることはない

この世は既に死んでいる

この宵はたった今生まれた

あの黎明は叫んでいる

あの黄昏は蠢いている

私たちは私たちという看守に監視されている

この社会は監獄という名を忘れている

『曖昧な名前より』

雲霧林

いらっしやいませー、

こんにちは、

おはようございます、

こんばんは。

どれなんだよって？

はは。

いやだなあ全部ですよ。

読み物なんですから、

読む人のことを考えなくちゃ。

ところで

この世界ではまあまあほとんどの物に名前がついていることをご存

じですか？

そうですか。

まあ当たり前のことですよ。

まさか！

馬鹿になんてしてないですよ。

それじゃあこうしましょう。

あなたはだれですか？

名前は？

年齢は？

性別は？

嗚呼、セクハラですか。

すみません。

……まあ世界には色々なあなたを形作るナニカがありますね。
では本題です。

それらは本当にあなたを特定するに値しますか？

同姓同名、他人の空似、たまたま年齢も出身地もぜえんぶ同
じ。

そんな人がほかに一人でもないと言い切れますか？

……そんなに怖い顔しないでくださいよ。

いやなに、あなたが面白いから、それだけ。

ただの好奇心です。

ほんとほんと。

……え？

じゃあお前はどうかんだよって？

えー、それ聞いちゃうんだ。

すごーい。

……俺に名前なんてありませんよ。

強いて言うなら神様みたいなものです。

神様ではないんですけどね。

結局自分なんて自分からは見えないじゃないですか。

自分では自分を自分たらしめるものを認識することはできないですよ。

親？ 俺の？

あいにくと、力不足で記憶喪失の神様なんです。

いるとしたらまあ、神様なんじゃないですか。

うん、うん。

え、「ぼくのこと覚えとる？」って？

忘れるわけじゃないですよ。

あの一、学校に行きたくないガキ。

あははっ、怒らないでくださいよ。

ちよ、いたっ、いたって！

まったく暴力的だなあ。

……ああいたんですか

え？ じゃなくて

あなたですよ

その

俺たちの話を見ているあなた

あなたはとうですか？

あなたは自分が自分であることを証明できますか？

……そうですか

ではどうぞこの問いの答えを探してきてください

どこに？

あなたの中にですよ

もうあるんですよ

あなには見えていないかもしれないかもしれませんが

なんで俺には見えるのか？

……ふふ

なんででしょうね

それでは、またのご来店をお待ちしています

短歌・俳句



月



俳句

輝けよ明日につながる今ぐらい

月光よお前は何を照らすのか

池水喜美

暮鐘の音掴めぬ声に辞す詠月

月を見てああ美味しそうなバナナだな

山化粧月で消してもまだ残る

おにぎり

奥底で見上げてみれば海月のよう

月末に乘るか躊躇う友の誘い

工藤花

星月夜穹の深さを知る人よ

文を待つ有明月と君を待つ

綴歩

通学にも勤めてげつようび

おとり草子

短歌

星を連れ御簾を下けたる新月よ綺麗と言えば夢に出るのか

月ごもり今はうさぎもひと休みもしもし亀よ今のうちだぞ

我が星が月を食らってしまうとき宇宙に出来る三食団子

大丈夫月では俺もゼロカロリーやはり今宵も罪なラーメン

おとり草氏

月あかり窓辺の家守影ひとつ誰が誰をも見守る夜かな

月あかり来るとも知れぬ家守待つわれぞをかしき夜を重ねて

月あかり窓辺見上ぐる夜の癖家守なきことまだ知らぬまま

楊潤成

十二年前に関する思考力試験

必ず以下の注意事項を読んでから回答すること。

〔注意事項〕

- ・一度この試験を開始したら、いかなる問題が来ても飛ばさず、順序を守って回答してください。
- ・回答できない、または回答しにくい問題では直感で答えてください。
- ・回答を開始したら、回答終了までインターネット等を使うことは禁止します。
- ・本冊子に直接書き込めるような鉛筆やペンを用意して回答してください。
- ・追加問題がページの後半にあります。通常問題の回答が終わるまで追加問題を見てはいけません。
- ・いかなることがあろうとも、この試験の内容は口外できません。

では、開始してください。

問一…以下に記すのは十二年前の新聞記事の内容を一部抜粋したものです。すべて読んでから、続く問題に答えなさい。

〔資料①〕

私立■高校で生徒の遺体。事故か自殺か。

九月十四日、私立■高校にて、当校女子生徒――河合伊織さんの遺体が発見された。当時正門付近に置かれていたブルーシートを清掃業者が回収したところ、ブルーシートで隠すように遺体があったという。

（中略）死亡推定時刻は午前七時半と見られている。

（中略）遺体発見場所のちょうど真上にはいくつか教室があり、その内の一つ、二階の端に位置する、多目的に利用されている教室の窓に足をかけたような泥汚れが見つかった。

（中略）以上のことから、警察は河合さんが何らかの事件に巻き込まれた、あるいは事故によって、二階の教室の窓から転落した可能性があると見て慎重に捜査を進めている。

（二）あなたは十二年前のこの事件を覚えていますか？

・はい

・いいえ

（三）あなたはこの時期、この私立高校で教員を務めていました。河合さんが亡くなった要因に心当たりがあります。適しているものを以下からすべて選びなさい。

・女子生徒は何者かにいじめを受けていた。

・女子生徒は何者かに強請られていた。

・女子生徒は何者かから逃げていた。

問二…以下に記すのは十二年前のニュース映像の一部を抜粋し文字に起こしたものである。すべて読んでから、続く問題に答えなさい。

〔資料②〕

生徒S…まさかそんな、って感じでしたね。みんな。河合さん性格いいし、みんな彼女のことは好きだったと思いますよ。

生徒T…伊織ちゃんは、中学の頃から一緒に……もう、なにがなんだか……

生徒A…伊織は、何か問題のあるような子じゃないんです。部活でも、うちテニス部が強いんですけど、その部長だったし……

事務職員Z…普通の学校生活で、窓枠に足をかけるとかはあまり考えにくいと思います。それも、彼女の場合は悪ふざけをするよ

うな子ではないと教員の方々もおっしゃっていました。つまり、事故の可能性は低いんじゃないかと思っています。

となると自殺か……他殺ってことになってしまいますけど……

(1)河合さんの遺体を確認されたのは当校の文化祭の翌日でした。あなたはその日、学校に出勤していましたか？

・はい

・はい

(2)河合さんの死亡推定時刻は午前七時半とされていますが、これは正しいですか？

・正しい

・正しくない

(3) 河合さんの死の原因は単なる事故ですか？

・いいえ

・いいえ

問3…以下に記すのは、事件から三年後に個人によって作られた、限られた者しか参加できない匿名掲示板に投稿された内容です。すべて読んでから、続く問題に答えなさい。

〔資料③〕

9/18

A:ここは私が開いた伊織を偲ぶための投稿サイトです。皆さん、伊織に伝えたいことをここに書いてあげてください。

S:伊織ちゃん、ずっと仲良くしてくれてありがとう。これからも大好きだよ。

N:河合先輩のおかげでうちのテニス部は全国まで行けました。もっとちゃんと感謝を伝えたかったのに……

T:クラスで馴染めなかった僕に、河合さんの方から話かけてくれてすごくうれしかった。ありがとう河合さん。僕だけじゃなくて、きっと色んな人が君に感謝しているよ。どうか安らかに。

A: 皆さん聞いてください。伊織は事故死とされていましたが、他殺かもしれないという可能性が浮上してきました。

S: え、ちょっと。相澤、お前何言ってるの？ 確かなのかよその情報。

A: 私が記者として調べてたから、情報源は私。申し訳ないけど、私はもう他殺だと思ってる。

M: でも警察の捜査の結果は事故だったじゃない。さすがに記者の調べの方を信じることはできないかな。

A: 一応根拠はいくつかある。その一つは……死亡推定時刻がね、ちょっと変なんだよ。

T: 文化祭の翌朝だってニュースで言ってたけど。

A: その日門を開けた人の証言が取れた。七時十五分には開けていたけど、そのときに正門近くにブルーシートなんてなかったって。代わりに□□先生の車が停めてあっただけ。

K: そんなの、記憶違いって可能性もありますよね。それにほら、文化祭の最終日の夕方ごろから翌朝まで雨降ってたじゃないですか。視界が悪かっただけでは？

A: いや、それはない。当時もその証言をして、警察と防犯カメラの映像を見たらしいんだけど、七時過ぎの映像にはたしかにブルーシートなんてなかったって。

T: え、ちょっと待って。防犯カメラあったんなら、伊織ちゃんの遺体をブルーシートで隠そうとした奴が犯人なんじゃないの？

A: それがさ、映ってないんだよ。前日の20:36に、伊織が画角外から落ちてくる瞬間はぎりぎり映ってたらしいけど、そこから伊織が見つかるまで画面が真っ黒で。多分、すぐ近くに雷が落ちてきた影響だろうって。

M: それほんと？ 河合さんが転落したのって、文化祭翌日の朝じゃなくて、文化祭最終日の夜？

だとしたら、河合さんをブルーシートで隠した犯人がいて、そいつは翌日八時まで河合さんを別の場所に置いてたってこと？

(中略)

S: え、待ってよ。なにそれ。それじゃあ……XXXXXXXXXXが、犯人ってことに……

(1) 河合さんの遺体は死亡推定時刻までの間、どこにありましたか？

・ ☐ 先生の車の車体の下

・ ☐ 先生の車の車体の下

・ ☐ 先生の車の車体の下

(2) なぜ死亡推定時刻が落下した直後ではないのか答えなさい。(記述式)

(3) (2)の結果からどんなことが言えるか、適しているものを以下からすべて選びなさい。

・ ☐ 先生が意図的に隠ぺいした時には、河合さんはまだ生きていた。

・ ☐ 先生が意図的に隠ぺいしてから翌朝まで、河合さんはずっと死ねなかった。

以上で、試験は終了です。

次のページに追加問題がありますので、よろしければ回答してください。

最後に、紛失防止のため、あなたの名前をここに書いてください。

あなたの名前を記入してください

追加問題…指定された通りにあなたの名前を記入しなさい。

〔追加資料①〕

9/14

A: 今日で伊織が亡くなってから六年が経ちました。しかし私たちは彼女の無念を無事に晴らすことができませんでした。

伊織、どうか安らかに。

相澤、清水、谷、松本、木村

〔追加資料②〕

昨夜未明、東京都在住の高校教師、

あなたの名前を記入してください

さんが何者かによって殺害されました。

(中略)複数犯の可能性もあるとみて、警察は慎重に捜査を進めています。

追加問題はこれで終了です。

もう一度、紛失防止のため、あなたの名前をここに書いてください。

あなたの名前を記入してください

※この試験の内容はすべてフィクションです。

※この試験の内容はすべてフィクションです。

※この試験の内容はすべてフィクションですか？

上野 高校



「闇鍋のつくりかた」

1 参加者(推奨七名以上)を用意し、プロットシート、主人公の名前をもちよります。

2 プロットシートを順繰りに回し、

- ・ 主人公の名前
- ・ 主人公の得意／不得意
- ・ 主人公の目的
- ・ 目的に立ちはだかる敵や障害
- ・ 目的を果たそうとする理由
- ・ 敵と対立する理由
- ・ 目的を果たした主人公はどうなるか

という項目を一人ずつ埋めます。

3 このプロットシートを元に、作品を執筆します。

『眠眠打破』

おとり草氏

我が名は民々瀬見（みんなみんせみ）。アブラゼミだ。

来たるセミパラダイスに向け、ミン主義ミンミン共和国の再建を掲げ、自由ミン権運動を行っている。

……………ん？ ミン主義ミンミン共和国が何かって？

それはもちろん、ミンミンのミンミンによるミンミンのための政治のことだ。

ただ、再建といっても、現存する文献は少なく、ほとんど情報は残っていない。唯一わかっているのは、それは遙か昔に潰えた文明であることだけ。聞いたところによると、我々の地上における寿命五十二個ぶん、それも人間でいうところの、一年？ 前に栄えていたらしい。

ともかく、気の遠くなるような歳月が経っている。なんたつて私の寿命五十二個分なのだから、今からだと、ハワイが日本にたどり着いているに違いない。

「……………それに、今は非常事態だからな」

ことの重大さを忘れないように、木の蜜をチュルチュル吸いながら、独り言で自分に確かめる。なぜ、情報もない国の再建を目指しているのか。そして、なにが非常事態なのか。それは、脱皮歴百四十七前、予言者モーセミによる、

「ωとπの素数（？）が揃ったとき、大地より出でしセミの大群が、波のように地上を席卷する」

という予言の一節が、七日後、七月五日に訪れるらしい、などとまことしやかに囁かれているからだ。七月五日といえば、人間たちも気がでない様子で、その予言の信憑性を確かにしている。

「まあ！ そんな御託はどうでもいい！」

何はともあれ、どんな体制であろうとも、国の再建、そのためには、我々の権威を高める必要がある。すべての生物に、セミへの畏敬を植え付けるのだ。

幹から下界を見下ろしていると、麦わら帽子の少年が、我々を捕らえ監獄に閉じ込める兵器を片手にこちらに駆けてくる。虫取り網というらしいが、なんと恐ろしい響きだろうか。

だが、私はそんなものには屈しない。羽をバタバタと奮い立たせ、

視界の真ん中に少年を捉える。そして、

「ミーーーーーッ！」

と叫びながら少年めがけて突撃する。

『うわあっ！？ アブラゼミがミンミン鳴いてる！』

少年はしりもちをついて後ずさると、手にしていた兵器、人間でいう虫取り網を放り出して逃げていった。そして母に泣きついている。

「ふはは！ 私に恐れをなして逃げていったか！」

私は翻訳ができないので、互いに言語は通じないが、きっと私の姿を見て恐れおののいているに違いない。

……よし、では次の――

「――ガあ！ ガあ！」

次の標的に向けて飛翔しようとした瞬間、我々の天敵が訪れた。黒い翼を広げ軍で行動する、悪魔のような奴だ。

「くっ！ カラスか！」

ここは撤退しなければならない。あいつは災害のようなものだ。

私にはどうしようもない。中途半端なセミリタイアをすることになるのは癪だが、致し方あるまい。

「一時撤退とさせてもらおう！」

――そびえたつ木々に寄り添いながら、私は息を整える。辺りにはジリジリという鳴き声がそこかしこから響いている。どうやら、ここには同朋が数多くいるらしい。

「……はあ。なんとか逃げられたか」

しばらくその場にとどまっていると、アブラゼミたちの様々な会話が聞こえてくる。

「ねえ、ヘアスタイルを変えてみたんだけど、どう？」

「……ん？ おお！ いいセミロングだね！」

「ふふ、あなたの筋肉もセミダブルで素敵よ」

「さあ！ セミ爆弾選手権も佳境に入ってます！ 決勝戦はもう目の前！ 準決勝はこの対決だあ！」

「足を閉じて、死んでいると思わせてから仕留めるのが最高なん

だよなあ！」

「俺はそんな卑怯なことはしない！……まだセミプロの未熟者だが、正々堂々足を開いてかかる！」

「いいぞー！ 樹液三滴賭けたんだ！ 負けるなよー！」

「セミファイナル（セミ爆弾）のセミファイナル（準決勝）だどー！？」

「万物は死に近づいていくと、神のお告げが聞こえたり、物事の真理にたどり着いたと錯覚することがあります。そして理解がとてもスムーズになったりしますね」

「せんせー！ 友達のツクツクボウシ君が、僕は特別な存在なんだ！ って言ってたけど、どういうこと？」

「ああ、そのような選ばれしセミが救われる、とか、自分が特別なセミであると考える。など、こういう思想のことをセ（シ）ンシン思想といって——」

……私には難しい内容を話している。最近の流行りというやつなのだろうか。ま……あ、楽しそうだから、良いことなのだろう。私も自分の使命を果たさなくては。

——そう思った瞬間、ケケケケケケケ、という鳴き声が周囲

に鳴り響いた。……………この声は——

「——ヒグラシ！？」

突然の新種に皆が注目したが、音の出所をみやると、そこにいたのはヒグラシではなかった。羽は茶色で、体は黒く、私たちに馴染みのある——

「アブラゼミじゃないか！」

「あつはは！ どーも！ 時代遅れの井の蛙ども！」

そのアブラゼミが羽をバタバタとしてこちらを煽ると、後ろから何匹、何十匹ものアブラゼミが出てくる。さらに、そいつらも一様にケケケケケと鳴いている。

「なんだと！？ われらの誇りを汚し、他の種族にうつつを抜かすなどありえない！」

「みんな落ち着け！ 仲間同士で争ってはいけない！」

「はん！ そもそもアンタ、アブラゼミのくせに民々瀬見てなんだよ！ おまえだって俺らと変わんねえだろ！」

「はあ！？」

同朋の視線が一瞬でこちらに向く。そして、先程まで彼らに向けていた目を私にもするようになったではないか。

「そうだそうだ！ こいつだってさきミンミン鳴いてたぞ！」

「なんですって！？」

「……っちょ……落ち着いて……」

議論の収集がつかなくなってきたころ、一つの単語が頭の中に浮かび、それによって私のすべてが腑に落ちた。

「……ああ！ これが民主主義か！」

やっと理解した。というか、簡単なことだったのだ。最初から、ミン主義ミンミン共和国は存在していた！

「ふははははは！ そうか！ これが真理！」

「……………あいつは何を言ってるんだ？」

「……………さあ……………」

なんて晴れやかな気持ちなのだろうか！ このまま天にも昇ってし埋葬だ……………ん？ ……………あれ……………なんだか、視界が定まらない……………

「……………ねえ、先生……………」

「……………ええ。そうですね……………」

……………なんだか眠たくなってきた。……………ああ、

「眠……………眠……………」

一、主人公のプロフィール(名前、年齢、外見など)は？

民々 瀬見(みんな せみ)、アブラゼミ、地上に出て一日

二、主人公が好きなことは？得意なことは？

人が通りがかった瞬間に飛ぶこと。

三、主人公が嫌いなことは？苦手なことは？

鳴き声をかぶせてくるカラス。

四、主人公の目的(叶えたいこと、求めるもの)は？

ミン主義ミンミン共和国を作り出すこと。

五、主人公が目的を果たそうとする理由

かつて崩壊したセミのセミによるセミのための団体を再建し、

次の素数ゼミ(13・17年ゼミ)大量発生に備えるため。

六、主人公の目的に立ちはだかる敵(人、物、事態)は？

ひぐらしの切ない鳴き声で寝返るアブラゼミが出てくる。

七、敵が対立する理由は？

アブラゼミという尊い存在であるのにひぐらしとかいうセミ界の風上にも

置けない輩にうつつを抜かしている、と思うアブラゼミ

VS

お前ら視野が狭いんだよ井の中の蛙め大海を知るがいいひぐらしの声を
聴け、と思うアブラゼミ

八、目的を果たせたら主人公はどうなる？

また幸せなセミライフを送ろう……と思った矢先死ぬ。

最後までご覧頂きありがとうございます。今回も作品数が多いため、二冊立てです。こちらは下巻になります。

さて、今回の全体テーマは「記憶」でした。楽しい記憶、思い出したくない記憶……日々生きていれば色々あるものだと思います。皆さまの記憶に残る作品を目指して筆を進めた、私たちの作品はいかがだったでしょうか。

小説「お伽噺」では、誰もが一度は耳にしたことのある物語のオマージュ作品もいくつかありました。しかし、「お伽噺」と言っても、それどころかの誰かの人生でもあります。それぞれが描いた「お伽噺」を様々な視点から楽しんでいたければ幸いです。

詩「名前」では、名前が思い起こさせる誰かとの記憶や、その存在を映す作品が多く集まりました。同じ名前でも呼ぶ人によって響き方が違うこともあるでしょう。それぞれがそこに込めた思いを感じ取っていただけたらと思います。

短歌・俳句のテーマは「月」でした。古くから多くの人に歌や句に詠まれてきた月は、きれいな満月だけでなく、新月

だったり、はたまた雲に隠れていたり。同じ月を見ても、感じ方もそれぞれだと思います。皆さまにはどんな月が見えたでしょうか。

「十二年前に関する思考力試験」はその特異性から独立企画としました。問題文に潜む違和感を見逃さないようご注意ください。

上高文芸部恒例の「闇鍋」では、実にカオスな設定の作品が生まりました。雑多な材料をぐつぐつ煮込んだ闇鍋を、どうぞご賞味あれ。

最後に、創文手帖文化祭号の制作にあたってお力添え頂きました顧問の鶴田先生・倉部先生と関係者の方々、苦しい締め切りでも制作をあきらめなかった部員たち、そしてなによりこの部誌を手に取り読んで下さいました読者の皆さまに、心から感謝申し上げます。

部員一同

上野高校文芸部誌 創文手帳

令和八年度九月十二日 第一刷発行

◆ 筆者 上野高校文芸部

◆ 印刷・製本・発行 東京都立上野高等学校

東京都台東区上野公園一〇―一四

◆ 責任者 部長 岡歩未 副部長 及川万葉 渡邊暖真

◆ 顧問 鶴田靖浩 倉部康 瀬治山大

落丁本、乱丁本はお取替えします。その他のお問い合わせについても上野高校の文芸部員にお声がけください。

本著を無断で模写転載、販売することはかたくお断りします。